

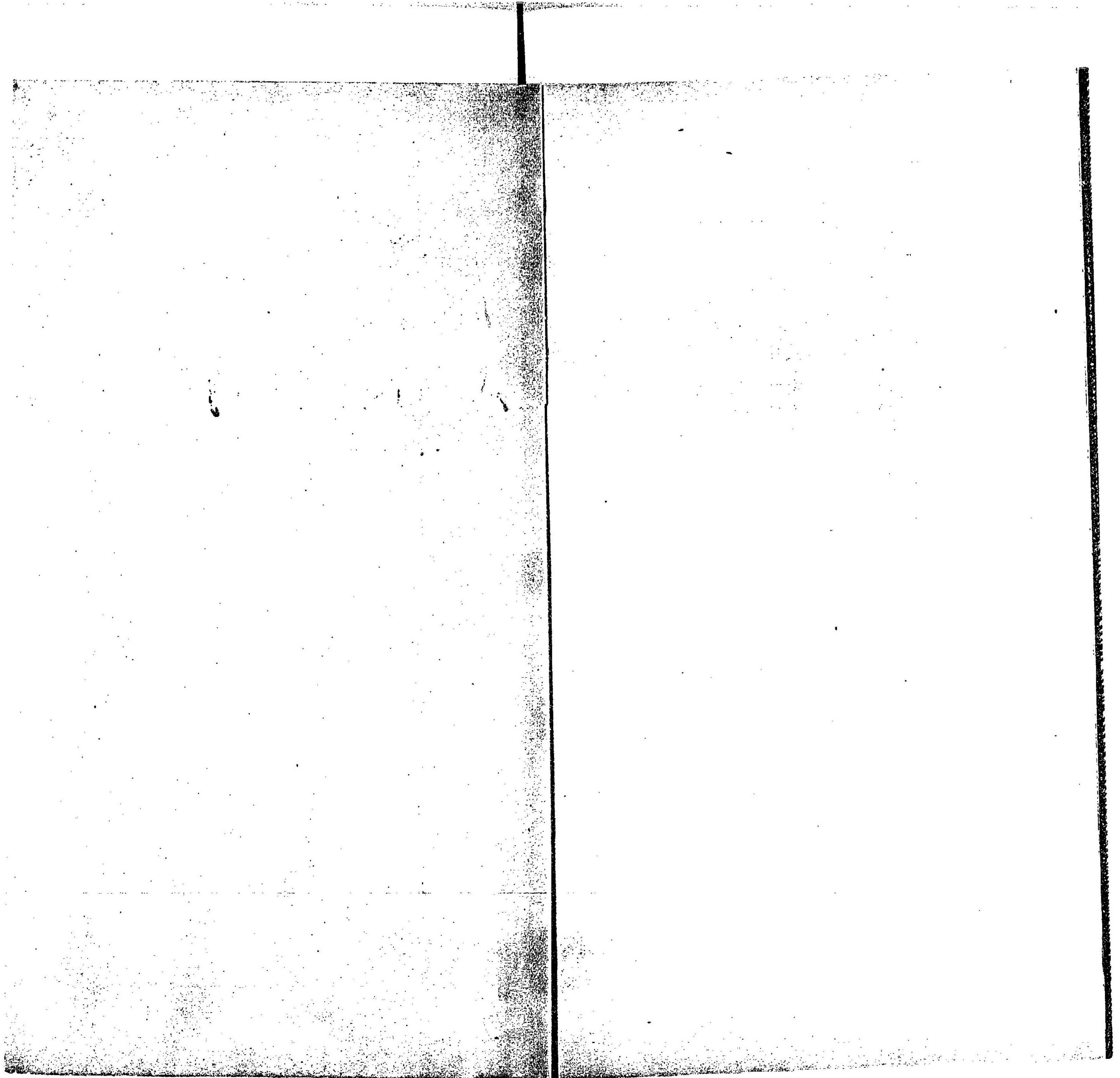
管

85

流  
七  
宗家  
橋旭翁先生校閲  
落  
上の巻  
大阪

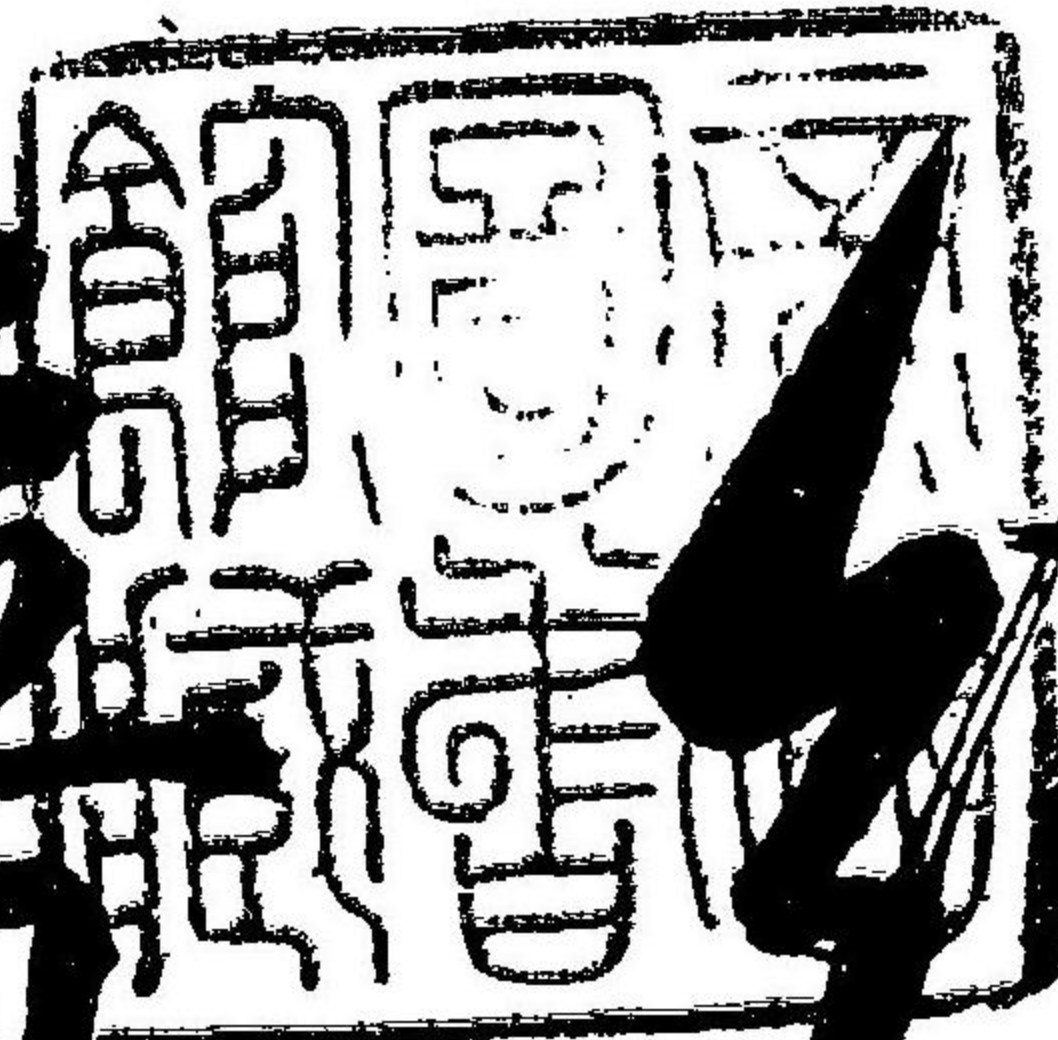
265

109



法中集  
善息緒

博見



明治  
43. 6. 27  
丙寅

己酉初夏

柳江題



七騎落上の巻

洞陽作

此處は何國ぞ相模なる

真鶴岬に立つ波も

荒き浮世を忍びつ

主従僅か七八騎

船を求めて江の方

吟ひ行す御大將

清和源氏の御末にて

清も流れを汲み給ふ

七騎落上の巻

左兵衛ノ介頼朝卿

潜める龍を學びてか

屈める蠖を習ひてか

治承四年の中ツ秋

平まりの三日の日に

石橋山の戦争に

敗れて恥を思ひつゝ

落ち行く先は氷沱の

安房の國へと志す

船出のよきまぞ憐れなる

頼朝卿は温然に

威儀を正し御言葉

如何に實平此船に

あるは八騎と申するを

七騎は家の幸にして

八騎は家の幸ならず

誰か船よりたろせよと

君の仰せに實平は

御供の人を見渡し

誰をか捨んすや小舟

波のまに〜行く者の

前途も知らず今こゝに

別る人のあるべきか

況てや累祖相傳の

主従なれば實平は

誰を撰ばん様もよく

困ら果てこそ展たけける

暫くありて實平は

岡崎氏に打ち向ひ

岡崎殿よ御身には

艦の方にたはすれば

陸にも近きといゆるん

たりて給へと云ひければ

岡崎義實云ひけり〜

やづがれ最早老いたれば

甲斐〜〜も用きた〜と

思及〜の事なるか

我に伏波の文なきも

勇は何〜に方るべき

スハ敵ありと聞くならば

武陵蠻野に屍をば

捨つるも敢て惜まねど

秋子の與市義忠が

石橋山の戦ひに

俣野五郎と列せ組んで

終に討死してければ

親子二人の其代り

君の御前途見届けて

然る後こそ死すべけれ

實平殿よ御身こそ

親子共々居らるれば

是はたなりて然らんと

いゝる言葉の理りに

團樂を離れ遠平は

父の前にと出て来り

誰の役のといはくあり

遠平自らたりなさんと

いゝるを聞きて實平は

其方はまだ一年若く

行く先も長き我君に

仕へて忠を盡すべし

我は老いたる老の身は

秋の木の葉にまじりたり

下風つつに散りて行く

真途の旅路近ければ

最早此世に望みなし

其方は君の行く末を

我に代りて見届けよ

とらばねよりたりのなにと

親子互ひの争ひに

斯ては果てると遠平は

弓杖つきて飄然と

けの方へ飛びたりぬ

斯と見るより實平お

遠平はと云ふ聲を

聞かざりて遠平は

纜切りて御船をば

沖の方へと一トつきた

つげは御船は和田の原

波路をわけて遠ざかる



これぞ親子が恩愛の

絆も切る、別れかど

知るやしらずや濱千鳥

チと鳴つて飛ぶまよ

いと憐れをます鏡

俄に曇る海と陸

武者ぶるとまの鏡にも

かゝる涙の雨やせめ

吹き来る風に波あれて

何地を的と定めなく

漂ふ船も末つひに

開くる雲こそ樂しけれ

明治四十三年六月十日印刷

全 四十三年六月二十五日發行

編發  
行人兼

有 村 彌 四 郎

大阪市東區和泉町二丁目一番地

印刷人

藤 井 護 三 郎

大阪市東區和泉町二丁目一番地

電話東四五五九番

發印  
行刷  
所兼

藤 井 改 進 堂

大阪市東區和泉町二丁目一番地

長電話東二七〇番

265

109

